
欠けたピーナッツ

野脇幸菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欠けたピーナッツ

【NZコード】

N6478

【作者名】

野脇幸菜

【あらすじ】

年をとった祖父と大きくなつた孫。祖父の家を訪ねた孫は彼の老いを感じて・・・。孫のやるせなさ、無力感を物語にしてみました。

大学生になると夏休みなど特別なものではなくなった。

暇な時間が増えるおかげでアルバイトと遊びに費やされる時間が、益々増えるだけだった。

しかし、休みをグータラと過ぐすことはなくなり高校とは違つて行動的な人間へと変貌した。

高校時代何かとグータラしていた自分にそうするくらいなら文句を言わず勉強しろよと説教したくなる気持ちにさせなる。

今日はそんな私にしては珍しく何も予定が入つていなかつた。

遊びたくても彼氏や友達と都合が合いにくくなることが大学生の夏休みの欠点だらう。

朝起きたときには十一時になつていた。

テレビをつけないと通常には見られないアニメ映画が流されていたが興味もないのですぐに情報番組に変えた。

今日の朝刊を紹介している。

テレビで新聞の記事を紹介することに矛盾を感じてしまつが取材に費やす時間を省け、

多くの情報を報じている新聞はテレビの情報番組には打つつけな

のだらり。

記事のキーの言葉を紙で隠してめぐつてみたり赤線を引いて読む仕事にテレビ人としての誇りは持つかわせているのかと時々考えてしまつが、やりたくない」とも仕事は仕事なのだらり。

アルバイトをやるよくなつた今は素直にやつ想える。

母は買いたい物に行っていたらじへー様のヒモを両手で食て食こ込ませながら帰つてきた。

「やつと姑あたのね。今日何もなーの?」

「うそ、今日は罷。」

「珍しこ。ねじこひやんの所に午後から行くからあなたもつこてきなさい。」

「えー。せだま。お盆に行つた。」

「癪番に会つたがつてゐわよじこひやん。」

「えー行つてもやることなー。」

「家でも回じよつなものだしぃ。」

「やれやれだナビー。あつ運転をしてくれないうことよ。」

「えーあんたの運転母さん怖いのよ。」

「お母さん乗せたのは当分前じゃない。あれから上手くなってるんだよ。友達にも言われたし。」

「アハ。わかつたわ。」

「やつた。でも、口出しちゃなこどよ。」

「はーはー。」

親の生返事ほど、この中で当てにならなこものは無こと私は思ひ。

私の運転中母は助手席から口を出し続けた。

止まるのよーだの、黄色よーだの、スピードをもつと落とせーだの、
いつひは

あんたのいきなりの大声で事故を起こしそうだよ。

祖父の家は私の家から車で約40分の場所にある。

半年ほど前に祖母が亡くなつたため祖父は一人暮らしをしてる。

母は毎日のように通い祖父の晩ご飯を用意し、時々は一緒に食べて
帰る生活が続いているようだ。

私は家で晩ご飯を食べる事がほとんどないのであまり関係無いが、
晩ご飯が用意されていないことや、遅く帰宅することに日々に父
は不満を募らせていく感じ。

母は母で祖父の食生活や年々弱ってきている祖父の世話をしても何が悪いのかと

理解のない夫に嫌気がさしているようだ。

家では不満のため息があちこちで聞こえてくるような状態で愚痴が私に向けられる。

ウンザリだ。

家には遅く帰宅し休日は外へ出でることが私なりの解決策である。

私の運転を注意するとき以外は母は父の文句を言い続けていた。

理解がないだの、「飯くらい自分で作れだの、嫌みに腹が立つだの同じような愚痴をまた聞かされた。

だから母親と一緒にいるのは嫌なんだと後悔しているうし、祖父の家に着いた。

私はすぐに車を降りて玄関を開けようとしたが 鍵がかかっている。

「最近玄関の鍵さえ開けてない日があるの。裏の勝手口から入りなさい。」

母が車のドアを閉めながら言った。

私は裏の勝手口から入り、祖父のいるリビングへと向かった。

扉を開けるとダイニングには電気がついておらず、リビングにのみついていた。

リビングに祖父が横になつた姿勢でテレビを見ている。

母の周りが腫れていて、お盆に会つた時とは違ひ体調が悪そつだつた。

「おじこちやん來たよ。」

祖父はしおびつて起き上がつた。

「愛香よく来ててくれたね。」

とこつもの言葉をかけてくれたが、それはまいづりみわらりに義務的な言葉に聞こえた。

よせび今日は悪いのだろ？

ダイニングの電気をつけると、母が部屋入つてきた。

「愛香も連れて来たのよ。今日は顔が腫れてて悪そつじやなこの。氣分悪いの？」

「悪くなんかない。」

「どうみたつて悪そつじやない。薬はちやんと飲んだの？」

と母とのやり取りは続いた。

私は3人でお茶を飲みながら代わつばえのしない、いつもの質問に答えた後

その部屋から自然に立ち去った。

私は仏間に行き祖母に線香をあげてから、密間のソファに横になつた。

あのままそこにいてもあれ以上話すこともない。

「ひつじこね方が氣楽なので、祖父の家に来ても結構はいりしていい。」

テレビをつけないと今度は毎の情報番組で夕刊を取り上げていた。

テレビが世に出ても新聞はテレビで紹介され、ネットが普及しても

テレビ番組はネットでアップされる。

何だか本当にシンカしたのかよくわからない。

気が付くと、いつの間にか眠っていたようだ。

このソファは気持ちがいいので、よく眠り込んでしまう。

祖父がドアを開け、愛香、愛香と呼んでいた。

「あつおじこねさん。寝てた。」

「なかなか呼んでも起きてくれなかつたよ。」飯だから。

「わかつたすぐいく。」

祖父はドア閉めて行つた。

私が食卓に着くとすでに煮物や柔らかそうな牛肉を焼いたもの、煮豆、玉子豆腐などが並べられていた。

一人分といったところだろうか。

三人でビールやお茶で乾杯して食べ始めたが、祖父は一口三口食べたところで箸を止めた。

「もう食べないの？全然食べてないじゃん。」

「いつもこんな感じなのよ。一緒に食べない時はもっと食べてないみたいだし。」

お盆の時は他の親戚たちもいて食卓の上は華やいでいた。

それに祖父の食欲など気にかけなかつた。

今食べた量は小皿一皿にのせても隙間ができる程の量だらう。

一口食べるごとにビールやお酒に手がのびて、休憩するが、おかずへはなかなか箸がのびないようだ。

結局、小皿一皿に盛つたほどどの量を食べた後に、とろろご飯を一杯だけ食べて

祖父は隣のリビングへと戻つていつた。

横になり7時のニコース番組を見ているようだ。

私は残つて いる料理を食べながら、昔の祖父を思い出して いた。

大食漢で酒好きだった祖父はビール腹のお腹をよくパンパン鳴らしては、

私に立派だと羨慕していた。

機嫌の悪い祖父など一度も見たことがなく、いつもニコニコして私を可愛がってくれた。

小さじ頃に「ちびまる子ちゃん」を見て いると、
あそこまでテレテレなおじいちゃんではなかつたが、
私と祖父を見ているようで親近感が沸いた。

でもいつからか、祖父のお腹の張りは無くなり引っ込んでしまったし、

私と祖父との関係も「ちびまる子ちゃん」とは違うものになつていった。

私は孫と祖父母の関係なんてそんなものだと思つたが、祖父の弱つて
いる姿を見て
何となく寂しくなり、自由に甘えることのできるおじいちゃんが少し
羨ましく思えた。

食べ終わると母は後づけを始めた。

私は祖父から離れたくてトイレに行つた。

手を洗いに洗面所へ行くと、洗濯物が溜まっていたので母が台所で片付けをしている間に洗濯することにした。

カゴの中には下着やシャツなどが乱雑に入れられていて、一枚重ねになつているものや

裏表が逆になつているものもあつた。

洗濯物を入れようと、洗濯機のふたを開けると中からうすらうと何かの臭いがした。

中を覗くと中には雑巾のように絞られたトランクスが2個の塊になつて置かれていた。

触つてみるとその物体は冷たく濡れていった。

何だか嫌な予感はしたが開いて確かめてみると、うすうす茶色になつて染み着いていた。

彼は体調が悪いとはいっても、それは心臓からくる持病のものであつて

決してボケが始まっているわけではない。

たまたま間に合わなかつたのだろう。

そう考えて残りの物体を開いてみると、ひかりにも同じ染みがあつた。

それも最初のものよりも面積は広かつた。

私はそれらを触つてしまつた手を気にしながらも、それらを端に寄

せ空いた場所に

カゴに入っていた洗濯物を直して入れた。

「どうしようかと洗濯機の端に手をおいて考える。

いや、どうしようともやる」とは決まっている。

そのあとがついている箇所に色物用漂白剤をかけて洗剤を入れて、スタートを押せばよい話である。

私はショックだったのだ。

彼の老いていく姿を感じさせる物体を目の当たりにしてしまったのが。

恐らく、母から最近そのよと聞いていたら少しのショックですんだだろ？。

もうそんなものなのかと思つただけかもしれない。だが、何か気づいてはならないものの第一発見者になつたようでそれが私を苦しめた。

彼は厳格な男だった。

誰よりも頼れる男だった。

働き者だった。

そんなイメージが脳内を占めている私には、それが今からますます消し去られていくのかと思うと嫌だった。

ただの漏れただけだとは思つ。

でも、私の確固として確立された不動の最高位の男は彼だけだったのだ。

男としてみんなに尊敬され私に無心の愛情を注いでくれる男はこれから絶対に現れない。

いい夫であつても恋人であつても彼らにはそれは越えられない。

私にはそれがなぜかわかる。

でも、一番ショックを受けているのは彼に違いない。

でも彼はたぶん気づかれないように風呂へ入るついでに自ら洗つて洗濯機に

申し訳なさそうに入れていいるのである。

それは、気づかれてくないと同時に、時々訪れる自分の娘や息子の嫁に汚い思いをさせたくない
という気遣いでもある。

彼はそういう人へ対する思いやりも敏感なほどに持つて、隠れて実行する人間であった。

彼の崩れていく様と記憶に残っている様が「じつぢやになり、私の感情を複雑化させた。

その感情に私はさりに戸惑い、彼がこの先どうなっていくのか不安になった。

しかし、こんな事を考える必要はないのだ。これからただ彼の人生が、彼の体のペースで老いていくだけなのだから
私にはどうしようもないし、関係ない。

私は自分の日常を生きていけばよいだけの話である。

氣を取り直して、洗濯作業を再開した。

パンツを底からつかみ、裏返しにして洗濯物の重なりの頂上に一枚とも広げ、
その上に目分量で色物用漂白剤をかける。

そしてスタートを押して、あとはおまかせ機能で表示された洗濯物の量を目安に洗剤を入れるだけ。

だが、洗濯機が回るのを待っていたが回らない。

おかしい。

ボタンの種類を見てみると、「電源入／切」は「スタート」とは別のボタンだった。

家の洗濯機とはかつてが違うので間違えたらしく。

携帯の機種が違えば扱いに戸惑つとの同じようなものである。

つい自分の物と同じ扱いをしてしまった。

仕切り直しだ。

電源を入れてそのボタンとは別のスタートを押す。
これでOK。

ピ―――！

洗濯機の高い機械音が流れた。表示を見てみるとフタの文字が赤くなっていた。

急いでフタを閉めると音は鳴り止み、洗濯機は動き始めたが、
すぐに洗剤を入れていなきことに気がつき、
おまかせの表示を参考に洗剤の量を量りフタを開けた。

しかし、ピ―――とまた高い音が鳴り響いたが、構わず洗剤を投入した。

案の定止まってしまった。

私にはこの洗濯機が未知なものに思えた。

けれども、理解できないままにはしたくなかった。

電源を切り、一からやり直してみることにした。

洗剤を入れ直すことはできないが、あくまで機能を理解するためだ。

この洗濯機には内蓋もついていて、内蓋には穴が直径5?の範囲にいくつか開いていて、水は内蓋の上からシャワーのように流れてくる。

今度は内蓋をさえしていれば洗濯機は止まらないと思い、外蓋は開いたまま電源を入れてスタートを押した。

だが、私の予想に反して洗濯機はまた止まった。

ますます理解不能な未知のものとなつた。

おまけに内蓋の穴は粉の洗剤は一応通り抜けられるが、確実に蓋の上に残ってしまう間隔で空いていた。

この洗濯機の存在意義は何なのだろう。

私の家の物よりも新しいのに、使い方は不便だ。

何が正しい方法なのか全然わからない。

私は諦めて外蓋を閉めて、運転を再開させた。

シャワーのように水が内蓋にかかり下に流れていった。

なぜ、内蓋の上から水を流す必要があるのかも私にはわからなかつた。

しばらく眺めていたが、水は止まり洗濯機は回り始めた。

ふと洗濯機の横を見ると一本のホースが目に付いた。

洗濯機に付いている風呂の残り水のくみ取り用の物と排水用の物だつた。

私は急いで風呂場の扉を開けて、排水用のホースを伸ばした。

これも家にはないものだ。

気づかなければ水が床に流れて大変なことになつていた。

全て未知だ。

この洗濯機も祖父も。

私にはわからない。

祖父はこれからどうなるんだろう。

妻もない、趣味もない、老いていくだけ。

彼には本当の話し相手や相談相手もない。

もちろん、自分の子供や孫たちはいる。

しかし、彼が本当に心を許し合える妻や友人は既に亡くなつてしまつた。

それは、決して私達で補えるものではない。

彼は仕事人間であり70歳を過ぎても仕事を続けてきた。

だが、引退してしまった彼には生きがいがない。

ただ、毎日寝転がりテレビをつけて一日を過ごすしかない。

心臓病のせいで動きたくても、しんどくてあまり動けない。彼は誰よりもいち早く自らの老いを感じ、ショックを受けているだろ。

だが、気遣いを忘れず必要以上に人に迷惑を掛けないし甘えない。

そのことが彼をさらに疲れさせている。

でも、彼はそれをやめないし、それを無くして欲しくもない。

私は何も彼のためにできないのに何て欲張りな考えばかり持つのだ

ろ。

洗濯機のチャップチャップと回る静かで新鮮な音を聴いていると、全てを無に書き換えてくれているようで、しばらく立ち去ることができなかつた。

リビングに入ると祖父は寝転んでクイズ番組を見ていた。

「愛香どこにいったんだ？」

「洗濯物が溜まっていたから洗濯してたの。」

「そうかあ、それは悪いことをしたねえ。そんなこと気にする必要

はなかつたの」「。

祖父は申し訳なさそうに手を振った。

気にする必要がないのはそつちだよ、体を動かすのだって、食べるのだって普通にできないのに。

孫になんか媚びを売る必要もないし、家事を手助けするくらいしか役に立てないんだから押し付けるくらいの気持ちでいいんだよ。

何でそんなに周り第一なんだよ、何でそこだけは年をとつても変わらないんだよ、もつ本当のじじいになつてゐるのに。

私はクイズ番組に田を向けながらも、ビツじよつもない祖父の問題が頭を駆け巡っていた。

イラつせやムカつきとは違う感情がわいてきて私を熱くさせた。祖父のしなびた手足に田を向けないように、テレビに顔を向けている母がやってきた。

「愛香、洗濯物終わつたみたいよ。

「わかつた。干すの手伝ってくれる?..」

「いいけど。」

洗面所へ向かい、量もせつがくはないのでその場で半分くらい、はたいて母に渡すと廊下にある干し物へ干しに行つた。

そして、私は残りの半分を一枚ずつ、はたきはじめた。

トランクスの染みは、大方はとれているようだつたので安心した。

あとはタオルが三枚ほど残つてゐるだけだ。

一枚取るとカラカラカラと何かが洗濯機の底へ落ちた。

ボタンでも落ちたのかと思い覗いてみた。そこには、小指の先ほど
の肌色の物体が落ちていたが、すぐにピーナッツの片割れだとわかつた。

消化されていないそのピーナッツは祖父に手洗いされたあともトランクスにくつついたままだつたのだろう。

私はそれに手を伸ばしかけたが躊躇して、ティッシュを一枚とつた。
そのティッシュで掴んで、開いてみるとピーナッツは欠けていた。

欠けてはいたがきれいに残つていたので、服か何かに挟まつっていた
だけなのかもしれない。

でも、そのピーナツを素手で触ることは出来なかつた。

一枚のティッシュを隔てたそのピーナッツはとても小さく、欠けて
いるその様は、咀嚼して味わおうとする期待さえも初めから奪つて
いた。私は見下している、卑下している。

いや、どうすることもできない、どうもじよつともしない自分の不
達成感を都合よくその感情に置き換えてはいるに過ぎないのかもしれない。

だがもう考えたくない、どうしようもない、私には関係ない。
ピーナッツをティッシュで握りしめ近くにあつたゴミ箱に放り捨て
ると、私は残りのタオルをはたくことなく取り出して洗面所をあと
にした。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
このような題材を長く引きのばして書いてもいいものだらうかと悩
みながら執筆しました。

洗濯機がドラム型の方は少し違和感があつたかもしません、申し
訳ない。

評価、批評もしていただければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478j/>

欠けたピーナッツ

2010年10月13日20時50分発行